

## 外国生活こぼれ噺 二題

阿部 頼政\*

### ゆすり・たかり・どろぼう

夢うつつながり、ふと物音を聞いたような気がして目が覚めた。部屋の中はまっくらである。「そうか、もうイギリスに来ていたんだな」と思いながら、何げなく窓の方をながめて、ギョッとした。何か黒い物体が窓から入って来ようとしている。泥棒だと直感すると同時にとびおき、入口のドアにふっとなだ。

心臓の鼓動がいやに高く聞える。すばやくドアを開けて逃げ道を確保し、電気スイッチをひねって「誰だ!!」と叫んだ。我ながら情ないようなかすれ声であったが、英語で叫んでいた。侵入者は窓からちょうど床に降りたところ、両手に武器は持っていない。よし、刃物なしでの1対1ならめったに負けないぞと安心し、いつでもとびかかれるように身構えた。

ところが、もっとびっくりしたのは侵入者の方だったらしい。床にへなへなとひざをつき、何か早口でしゃべりまくった。私に理解できるはずがない。

「もっとゆっくり話せ!!」

「大きな声をたてないでくれ。また、空手は絶対に使わないでほしい。自分は隣の部屋の住人だ」

「どうして窓からなんか入ってきた。もう12時過ぎだぞ」「鍵を忘れたんだ。それで、おまえの鍵を借りて試してみようと思ったんだ。とにかく鍵を貸してくれ。」

私の部屋の鍵で隣のドアが開くはずはないし、もっとどなりつけたかったが、うまい言葉がでてこない。それに、目の前に立った男の体格はプロレスラー並みである。私は、後ろから襲われないように気をつけながら、机の上にあった鍵を渡してやった。男は、それをひったくるようにしてとると部屋を出ていき、隣室のドアでがちゃがちゃやっていたが、間もなく戻ってきた。そして、私が止めるのも聞かずにまた窓から出ていった。私の部屋は3階にある。日本の家屋とちがいで、レンガ作りの建物では、手掛りがほとんどなく、暗闇の中を下まで降りるのは命懸けの作業になる。しかし、その男は下に降りて

行ったのではなく、すぐ横にある自分の部屋の窓に手をかけ中に入っていったのである。

一人になって流石にほっとしたが、すぐには寝つけない。ウイスキーを飲みながら、あれこれと考えた。イギリスに来てYMCAのホテルに滞在し始めてからまだ一週間たらず、今日は、夕方明かるいうちから寝てしまっていた。隣の男はそれで留守だと思ったのではなかろうか。鍵を忘れたというのは、もちろん嘘だし、外から帰って来たのではなく、自分の部屋の窓から移ってきたのだ。私の部屋に入った途端、電気をつけられ、どんなにか、びっくりしたことだろう。そして、私が空手を知っていること、また「日本人が空手を使うのは相手を殺す時だけだ」と私が言ったことを誰かに聞いていて瞬間的にそれを思い出したにちがいない。

このYMCAホテルには2週間滞在した。宿泊費は3食付きで週に13ポンド(約8,000円)、何よりも安いのが魅力だった。YMCAのホテルは通常、長期滞在を許さないと聞いていたが、イギリスは例外なのであろうか、2年、3年と居すわっている若者が多かった。そして彼等の半分以上は失業者であった。いや、失業者というよりも、労働意欲のない者達と言った方があっているだろう。政府から支給される生活費は、ホテル代を払ってなおかつ、毎晩飲みに行ける程らしい。まじめに働いても税金(最低で給料の35%)を引かれると、無職の場合とあまりちがわないため、働らくのは馬鹿らしいと広言している者が多かった。

私が最初に知りあったのは、そういう若者達であった。彼等は朝食を済ませるともうすることがない。外に出ると金がかかるので、もっぱらホテルの設備を利用して遊んでいる。その中に、空手(コンフー)の型を議論しているグループがあったので、思いきって話しかけてみた。彼等は、私の下手な英語に一瞬とまどったような顔をしていたが、私が日本で空手をやっていたと聞き大歓迎してくれた。矢つぎばやに色々質問されたが、一人一人、英語以外の言語を話しているようで私には半分も理解できない。そのうち、標準語(少なくとも私にわかりやす

\* 日本大学理工学部講師

い英語)を話す者が通訳をしてくれて、お互いの話がかなり通ずるようになった。最後には、実際にやってみようということになり、彼等のうち2人が試合を始めた。両方とも自己流らしいのに安心し、私の平安の型を見せてやった。

ところが興奮した1人が試合を申し込んできたのには閉口した。そこで「殺すことになるかも知れないが、それでもよいか」と念を押したところ、びっくりして「ノー」と言ってひっこんだ。まわりの連中もほっとしたらしいが、一番助かったと思ったのは私であつたらう。素人とは言え、見あげるような大男と試合して勝てる自信はあまりない。

私の部屋に夜の侵入者があつたのはこの2日後のことである。

一度きっかけがつかめると話相手はどんどん増える。誘われるままに、毎晩パブ(開放的なバーのような感じの酒場。イギリスの社交場と言われている)にでかけた。彼等はあまり飲まない。話をしながら中びん程度のビール1杯を1時間ぐらいかけて楽しむ。私は最初、それが彼等流の飲み方なのかと思って真似をしていたが、そのうちがまんできなくなり、2杯、3杯と飲むようになった。そして彼等の様子を見て気がついたのは、彼等のまた飲みたがっていること、しかし毎日何杯も飲むには金がないので我慢しているらしいことであつた。私は、彼等が気を悪くすると困るなど思いながらも、「私がおごるからもっと飲まないか」と切り出してみた。とたんに喜んだ彼等は各々残ったビールを一気に飲みほして、われがちにカウンターの方に向っていった。

私はその素直な態度に好感を持ちながらも何か哀れな感じがした。20才前後の若者が働らずに食べていけるということは、社会福祉のいき過ぎではなからうかと。5人に2、3杯ずつおごってやったが、勘定は2,000円を超えなかつた。その後、最初の一杯は自分たちで払うが、追加は私ということで、毎晩6時になるとさそいがかかるようになった。私にとっては英会話の安い授業料であつたが、彼等には鴨が舞い込んだ思いであつたらう。

仲間の一人、トニーに話があるからと彼の部屋に呼ばれたのは、いつものように飲んで帰った後だつた。彼の身上話によると、彼はビルマ人で妻子をアメリカに残して来ており、一日も早く呼びよせるためにせっせと貯金しているのだという。貯金通帳をちらつかせながら、「これは使いたくないが、5ポンド(約3,000円)どうし

ても明朝必要なので貸してほしい、2日後には金が入るからその時に必ず返す。」要するに借金の依頼であつた。昼間、働らいている様子もないし、アメリカに妻子をおいてイギリスで働らくというのは多少変だと思つたが、それまで色々世話になっていることでもあり、5ポンド貸してやった。

一見哲学者風のマイクから2ポンドの借金を頼まれたのはその翌日であつた。大した金額でもないのですがすぐに応じてやったが、マイクの話によれば、トニーへの貸金はまずもどらないだろうとのこと。身上話そのものがでたため、トニーはれっきとしたイギリス人だとのことであつた。

約束の日、トニーは朝から部屋に閉じこもつたままに昼食にもでてこなかつた。私との約束を知っている仲間の一人が、ドアをけやぶるようにして、トニーを起したが、酒臭い部屋で半分うつろな眼をしているトニーを見ると黙ってその場を去っていった。私にもいふべき言葉はなかつた。

一方、マイクも返す気はなかつたらしい。タバコを買う金がなく、パブですいがらを何個か集めては、巻き直して吸っている姿を見ては、約束を言い出す気にもなれなかつた。しかし、さらに3ポンドの借金を頼まれた時には、はっきりと断つた。

金で友達を買うつもりは全然なかつたが、金にからんで親しくなつた友達は、やはり金の問題から離れて行つた。私は、もうそれ以上、自分のもとより、若者達をも傷つけたくなかつた。数日後、ほろ苦くまた懐かしい思い出を噛みしめながらYMC Aホテルを去つた。行先の住所は誰にも教えなかつた。

外国生活も一ヶ月をすぎると、風俗、習慣になれて、英語も多少自信めいたものがつく。私がロンドン見物に初めて出掛けたのは、そんなある日のことであつた。東京なら、さしずめ銀座に相当するピカデリーサーカス駅(地下鉄)に降り、地上に顔を出したとたん、パチリとシャッターをきる音が聞え、身なりのきちんとした紳士がにこやかに話しかけてきた。私はとっさにマスコミ関係の人だなど判断し、乞われるままに住所氏名をノートに書いてやりインタビューに応じた。

「日本の方ですね。御旅行ですか」

「いや、仕事でロンドン郊外に滞在しています」

「イギリスに来てからどのくらいになりますか」

「ちょうど1ヶ月くらいです」

「それにしても英語が上手ですね。これからどのくらい滞在されますか。」

「ほぼ1年近くの予定です」

「ロンドンの印象はいかがですか」

「今来たばかりでこれから見物というところですよ」

「それでは、あの建物をバックにしてもう一枚写真を撮りませんか」

私はマスコミ関係者としては多少変だなと思ったが、英語をほめられたことで気をよくし、彼のいうことに従った。ところが、カメラをしまった彼は、おもむろに「16ポンド（約1万円）です」ときりだしてきた。私はやっとほめられたことに気がついた。それにしても何と巧妙な手口であろうか。私が英会話に生半可な自信を持っていたこと自体がかえって仇となっている。それに、住所氏名を書いたこと、もう一枚の写真にOKしたことは何といってもこちらの失敗である。こうなったら、多少の損はしようがないとしても被害を最小限度に食い止めようと覚悟をきめ、交渉にとりかかった。

「16ポンドとは高すぎる。どういう計算なんだ」

「写真は4枚1組で、カラーの大版だから1枚2ポンド、あなたの場合は2組だから16ポンドになる」

「最初の写真はそっちが勝手に撮ったものだからいらない。あとの1組も普通版ということで4ポンドなら払おう。」

「だってこれはカラー写真だよ。カラーは高いんだぜ」

「日本では子供でもカラー写真の値段ぐらい知っている。1枚半ポンドもするものか。とにかく、こちらは4ポンド以上は払わない」

彼は、それ以上、何か言いかけたが、私の眼が血ばしってでもいたのだろうか。案外、簡単に折れた。しかしいざ4ポンドをポケットから出し、相手に手渡そうとする段になり、急にまた口惜しさがこみあげ、ぶんぐってやろうかと相手をにらみつけたところ、ニコニコされて、拍子ぬけしてしまった。ところが、写真を必ず送るように念をおしてその場を離れようとしたとたん、急に現われた3人のやくざ風の男にとりかこまれた。私は気がつかなかったが、それまで話のなりゆきを注意していたのであろう、全額支払えという。今度は私も口が開けなくなってしまった。地下鉄の出口からは絶えず人が出てくるが、我の方に関心を寄せる者は誰もいない。しかし、助け船は以外なところから現われた。張本人の紳士があわてて寄ってきて、「彼は旅行者じゃない」と一

言仲間に告げた。それで話は通じたらしい。3人は人ごみの中に隠れ、紳士はまた地下鉄の出口でカメラを構えていた。私は人波にもまれて歩き続けながらぼんやりと一つの事だけを考えていた。今すぐ日本に帰る口実はないものだろうか。

### その機会あれこれ

いかに、仕事一辺倒の旅行であっても、海外に出るとなれば、男子たる者、誰でも「機会があれば……」とひそかに期するところがあるのではなからうか。そして、その機会は色々な形でころがっているようである。

私はマッサージが好きで、月に1度はサウナに行く。サウナ風呂で汗を流し、マッサージを受けてから飲むビールの味は最高と言ってよからう。ロンドンの市内に「サウナとマッサージ」の広告を見た時はしめたといい、「値段は多少高かったが、思いきって中に入った。外装の立派さにくらべて、サウナはおどろく程貧弱であり、シャワーしかないのが不満であったが、20才ぐらいの美人が何かと世話をしてくれるので、文句も言えずにいた。マッサージも期待はずれだった。日本のような指圧式ではなく、全身にオイルをぬってなでまわすだけである。マッサージの技術も素人くさい。そのうち、マッサージ嬢が私を見ていたずらっぽく笑っているのに気がついた。何も知らずに入ってきたのかと言う。私もさすがにピンときた。そこは、個室ではあったが、薄いベニヤ板で囲いがしてあるだけで、隣の話し声もかなり聞える。そこで私は声を小さくし、ここは、これこれしかじかのところかと聞くと笑ってうなずいた。彼女の話によると、受付で2階希望と言えばそれ専用の部屋があり、料金は30ポンド（約1万8千円）、彼女の都合は土曜日がよいとのことであった。私は再会を約し、マッサージの選手交代をするだけでその日は帰ってきた。しかし、一度そういう場所だとわかってしまうと、なかなかいく気にはなれなかった。次々と土曜日が過ぎていき、いつの間にか彼女の名前も忘れてしまっていた。

毎週、火曜日と木曜日の夜は、カレッジの英語講座に通った。最初は英調の勉強が目的であったが、途中からクラスの仲間と会うのが楽しみになった。クラスの大半は、フランス、スイス、イタリア等からやってきた20才前後の女性で、授業が終ると誘いあってバブで話をするのが常であった。

彼女達はオウ・ペアと呼ばれる言わば女中で、イギリス人の家庭に入って英語を勉強するのを目的としていた。それぞれが、お国なまりで話す英語は聞きとり難かったが、お互いの言いたいことは十分に理解できた。ただ、彼女たちが大声でセックスの話をするのには閉口した。周囲のイギリス人は無関心をよそおっていたが、内心あきれていたのではなかろうか。彼女達には私が金持に見えたのであろう。何かの折に2人きりになると「電話をここに掛けてくれ」とか「ロンドンに連れて行って欲しい」とかささやきかけた。フランス人の女の子などは、もっとはっきりしたことまで言った。

私は、そういう誘惑めいた話には乗らないようにしていたが、1人だけスイス人で気に入った女性がいた。他のオウ・ペアとちがいで、彼女は清純な感じであった。夜遅くなった時など、よくタクシーで送ってやったが、彼女にもこちらの気持が感じられたのであろう。次第に親しみを見せるようになり、いつか、個人的につきあうようになった。後に、チューリッヒに寄った時は彼女が案内してくれ、家族からも歓迎された。彼女の家は、チューリッヒ湖畔にあり、百米四方ぐらいの大きな庭があった。

アムステルダムは飾り窓の女で世界的に有名である。私が行った当時は、日本人の死体が運河に流れていたという話をよく聞いた。旅行中、私は外に飲みに行かず、ホテルのバーでパーティーと話をするのを楽しみにしていたが、到着した晩も早速パーティーに色々話しかけた。

「夜の町は危険だと聞いたけど、飾り窓は大丈夫かねえ」  
「それは平気ですよ。先方も商売ですからねえ。ただ、余分な金は持って行かない方がいいですよ」

「このホテルの客もでかける人が多いかい」

「皆さん好きですよ。特に日本の方はねえ」

それまで話を聞いていた隣のアメリカ人が、パーティーに場所をたずね、「グッド・ラック」の声に手を振りながら出て行った。バーの客は少なく、私はパーティーと一緒に飲みながら12時過ぎまで話し込んだ。翌日もおそくまで飲んだが、ドイツに対するうらみをたっぷり聞かされた。オランダ人にとって、第2次大戦中はいまだに忘れられない地獄だったようである。

3日目の晩、いつものようにパーティーと話し込んでいると、若い女性が隣りに座り、話しに入ってきた。彼女はフランス人で、スペインにある商事会社に勤めているが、休暇でアムステルダムに来ていらしい。金髪のす

りとした美人であったが、英語はあまりうまくなかった。しかし、話ははずみ、彼女も楽しそうに一時間程過して自分の部屋にもどっていった。そのあと、パーティーから「どうして彼女を誘ってやらなかったんだ。お前は彼女が気に入らなかったのか」彼の説によれば、彼女はそれが目当てで私の隣に座ったのだという。そう言われてみると思い当たる節がなきにしもあらずであった。惜しい機会を逃したかなとは思ったが、パーティーの言うように、すぐ彼女の部屋を訪ねて行くほどの熱意は私にはなかった。その晩はペースが狂って飲み過ぎたらしく翌日2日酔いで悩まされた。彼女に会ったのはその晩が最後であった。

外国の都市を夕方から夜にかけて出あるくと、街角でよく女性に声をかけられる。パリ、フランクフルト、ニューヨーク、サンフランシスコが特に多かった。一眼でそれとわかる女性は案外少なく、こちらが意味をとりちがえたのかと時々思った。声のかけ方でスマートだなと感じたのは、「タバコの火を貸して欲しい」というきり出し方であった。こちらはつい立ち止って、マッチをすってやったり、火のついたタバコを貸してやることになる。そしてお互いの顔が近づいた所で“Would you like to dete tonight?”, つまり「今晚いかが」と誘いをかけてくるのである。もっともこの方法は、その道ではポピュラーなのか、3回程お目にかかった。けっ作だったのは、ハワイで見た方法で、車の助手席に女性を乗せ「40ドル、40ドル」と叫びながら車を徐行させていた。現地の人に聞いたところ、街頭での客引きに対する取締りが厳しくなってから流行している方法だということであった。世界の大都市、東京ではどんな方法がとられているのであろうか。東京に住み始めてからもう20年になるが、いまだに声をかけられた経験がない。

1年間の海外滞在中、その機会は数えきれないくらいあった。しかし、内心の思いは別として、結果的にはそれらをすべて避け通して帰国した。理由は“勇気がなかった”の一語につきるのであろうが……。絶好の機会をみすみす無為に過したことを後悔し始めている今日この頃である。